花乃宴

五

詞を名もせり

ハナノエンチ

源氏十九才宰相中将正三位

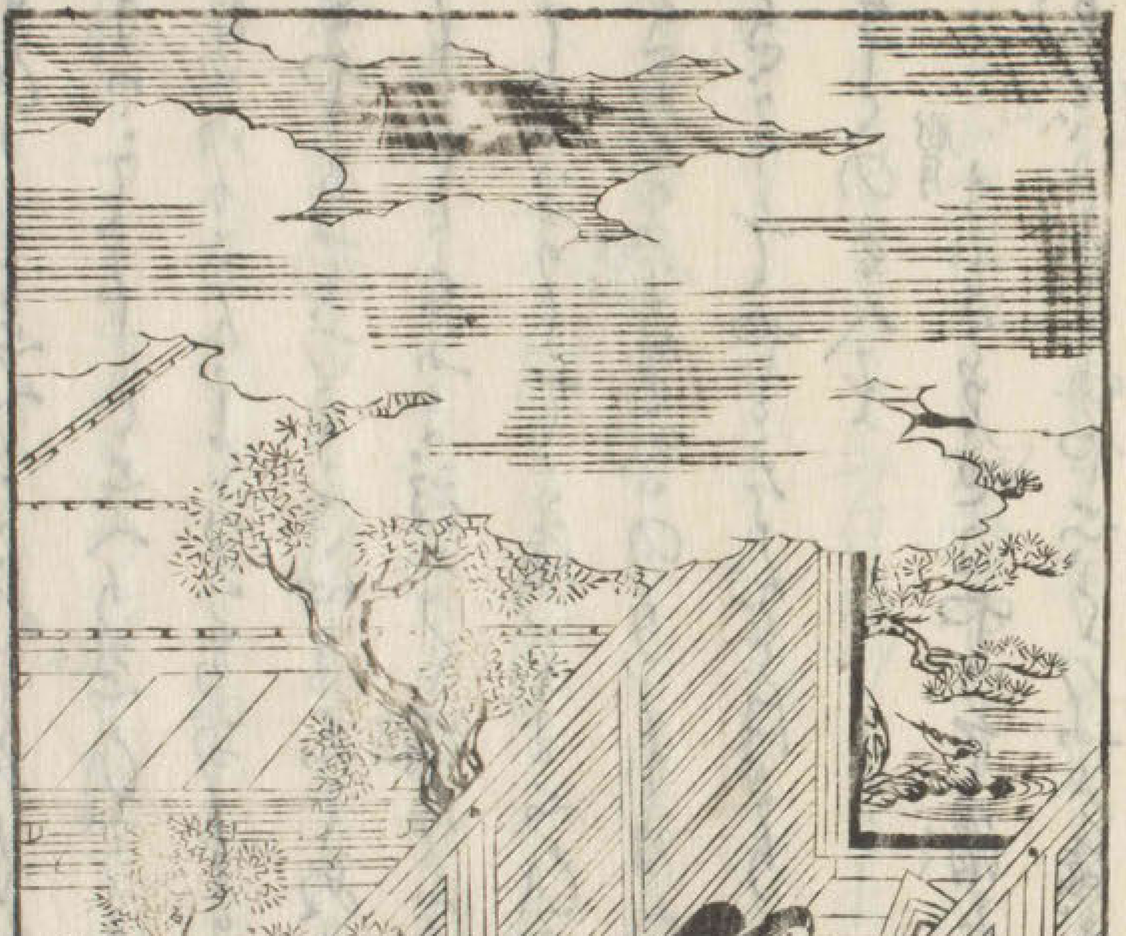
きさらぎのはつかあまり。南殿の桜のえんせさせ給。后。春宮の御つぼね左右にして。まうのぼり給ふ。弘徽殿の女御。中宮のかくておはするを折ふしごとにやすからずおぼせど。ものみにはえすぐし給はでまいり給ふ。日いとよくはれて。そら色鳥のこゑも心ちよげなるに。みこたち上達部よりはじめて。その道のはみなたんゐん給はりて。ふみつくり給ふ。宰相中将。春といふもじ給はれりとのたまふこゑさへれいの人にことなり。つぎに頭中将。人のめうつりもいかゞとおぼゆべかめれど。いとめやすくもてしづめて。こはづかひなどものものしくすぐれ

うぢそのへにいはれおかしがらずされどころの
ありか地下の文人はまして堂家の成ずて
しらくすずれておかしきすぢうらうるにやむごと
なき人へおほくもめし給ふころなどなゑげうし
てうくひとくまりなるさ庭に立出給ふらしき
くそやまさ程のことなれどうらしげなりけらし
老いろうせどもの心やつれやつれてきいある
さるも哀なる様ぐらんずるおかしかりけるが
くどもあすどはさうるにもいらずさるのへさせさつます べり
やうく入日になる程に春の鶯さしづかといふ舞など
おもしろくうゆかに源氏の紅葉の賀のおりおぼ

し出られて堂家がたしら夜はましてをりにせめの
夜はするほどのつれづれがたてのどかに袖人
も前をひとおもれ気色だちあひのあるに前べきも
のあるかる中庭のおもぶらかめしさもまれて酒つぎて
し給ひ中ねいづるとそしもあれば柳営苑といふ
舞をかれは今もくろしうちすずしてかろこゝや
まやく心づかひやさけんいはく面白ければ此衣のり
てはためづらしきことは人せんかうかんづらめかこれ
かぶれてあひのあへど其まへてはじとまろらめもこえ
すぢなどうつるずるにも源氏の君の成をはかうじ
もえやして旬ごとにまいとのまたせどもの心

こといふぞかへりがたのおりはもさらにこのさんなを
光る君のすがたをもいひてたてまつるにおぼされん中宮
けめがたとまのるまつけて春宮の女御のおかげちかより
なにがらんもあやしうかがうなふもとろうし
とぞいふげかうおぼしらんたれけり
大かたは世のそしりをもおもひもかぶつめも心乃
これもしや此心のうちなりけんこといふべもう
ましけん夜いてうちけてなんごとろてけむ上達部
見るあかれ后東宮へしせのひぬれば、のとや
かまたすらめりるおいとおかうさしいそぎおかうさ
此源氏の君の思ひ心ちはさすしげくおぼし給

されば内のへの人ぐもうちやすみてやうやうはおぼえ
けぬ御まゐりしきりぬべきさひはまやあるとふかう
つかはしをかりなり思ひてうちひなりけれど
なきふべきとくちかきて、されば、うちなげきさ
てかをあらじは弘徽殿のほそどのは立よりたま
へれば三のくちあきたり女院のうへのれつかれは
そでまうのおりはひるなればたずくるかれてひ
なりおくのたまどもあふさて人はともをすゞや
うちて世中のあやまちいするぞうしとおもてや
よりのほりてのぞき給人はされねるべしいかゞ
ちうおうしげなるこゑのなべての人とは聞えぬ



十四

おぼろづきよにゝるものぞなきとうちずして
こなたざまにくるものか。いとうれしくて、ふと袖(そで)を
とらへ給ふ。女おそろしとおもへる気色(けしき)にて、あなむく
つけ。こはたそとの給へど、（源詞）なにかうとましきとて
（源）ふかきよの哀(あはれ)をしるもいる月のおぼろけなら
ぬ契(ちぎり)とぞ思ふとて、やをらいだきおろして、戸はおし
たてつ。（女）あさましきにあきれたるさま、（源）いとなつ
かしうをかしげなり。（女）わなゝく/\、人のとのたまへど
（源詞）まろはみな人にゆるされたれば、めしよせたりとも
なんでふことかあらん。たゞ忍(しのび)てこそとの給ふ声に、（女）
この君なりけりと聞(きゝ)さだめて、いさゝかなぐさみけり

女 さびしさそへるともれくる、おもかげうすくこぼれくし
すゞしさとそへり思ひこゝろや御れいなるゝぞなれ
めんゆうさんことはうちおもしろる。女もかはうき
やさすて、うきさ心もむしかめなるべしらうさ
しとゞのなみだ猶あすく明ゆくまばらかあいらつ
し。女ハおもしてさ面くまさひらぶれくるそし
ふさなりおもをかのりしるへいふでゝきてしめべ
きうりでやみなんとはさうともおぼされじ
なをとのあへで
しらきせるやうで消なばあわれても草の
末をとうしとやさしいふさ面。えんはなすまめつさ

まうじらりやなくえしるべへうちもし給をそ
いづれぞとおのやどりとさらむまるこほでがい
らまりせましてうけがりつつうおぼせてとか
らずにみなゆつてきんむもしすひるふふらでしと
えいひのあへど、人てかさはぎうへのけつ保たる面
いちらふふ身気ともしげくまいるへいとかりぞく
ておなざりとうしまさうへてむなぬすう
つかまひとくめ保くゝうひてはどろ。ふてうつ
もあれバうるとぶもさ面とおすされ悉びあるさふき
れとつきあひつきそれとぞしあへちいう
のてかしあへれどもかなれぞ。おうしろうつる人

の御方ゝか女御のはおとうとこそはあらめ
まだ世なれぬは五六の君なるらんかしそちの宮の
北のかたは頭中将のすさめぬ四の君などこそよしと
きゝしが中〳〵それならましかばいますこしおかし
からまし六は春宮にたてまつらんとこゝろざし
給へるをいとおしうもあるべいかなわづらはしう
たづねむほどもまぎらはしさてたえなんとは思はぬ
気色なりつるはいかなればことかよはすべきさまを
をしへずなりぬらんなどよろづに思ふも心の
とまるなるべしかやうなるにつけてもまづかの
わたりの有様のこよなうおくまりたるはやとあり
がたう思ひくらべられ給ふ其日は後宴のことありて
てまぎれくらし給ひつさうの琴つかうまつり給ふ
昨日のことよりもなまめかしう面白し藤つぼは
暁にまうのぼり給ひにけりかの有明出やしぬらんと
心もそらにておもひいたらぬくまなき良清惟光と
つけてうかゞはせ給ひければ御まへよりまかで給
けるほどにたゞ今北のぢんよりかくれたちて侍り
つる車どもまかり出る御方ゝのさと人侍りつる
中に四位少将右中弁などいそぎいでておくり
し侍りつるや弘徽殿の御あかれならんとみ給
へつるはけしうはあらぬけはひどもしるくてくるま

こゝろわかれとそてあつまもはんれうちつゞれ給はゞ
まていづれもちんち・大君おとゞなどこそ一とゞ
とゞしうめてなされんも、いかがやまさへのかう
さ殿よりかんさぶめほどはかゞりうるべしさ
まとてもてそでおもんぐるいゝとくちおしへ
それはいるまをまつしとおぼしかゞひてうぐ
とみずがんうつかへり姫宮いつまつれぐこえずらん・
日ごろまなすればかくしてやおもんとらうさくおぼし
やるみえもうしの扇はさうしのえんぐされまてござさ
おきまうともめる目とこそ水まうけしいする心ぐん・
めなれたれども中へたちしりまてまし〳〵うち

草の原とぞいひし殿の心まうけくさの人ば
世まちてぬるこそすれ明月の月の光
とそまほまうへてとゞきつけおて益まへりおぼい殿
まもひさしうおもりけるとおぼとぞかご君も心
ならしされはらんとおぼして二条院へわた
らしぬぢうまのはいとうけうけげるおひなりて・
あいなやうつきぢらうくもつき心ぐんへいとゞなう
ながぬ所なう・かゞれ心のまつるまかゞしへなりさんとお
ぼそるうるひめべし・おとこの中なしへなれど・
すらしへなれさるこゝとやまうじらんと思ゑてうこゑ
かくされ日ごろの御物語しよそよしへくら

してぞ遊女を例のとゞろおしうお猫をとゞ今に
きやとふうおもらいされてゆりかくハ志くさひまそれハ
まず御猫ゐるの主れいのかとせさいめんし遊女くず
つれぐさとよろ川柳しめぐらされてざうのれこ
とまうさぐりてやりしまるぬる来ハおすくてとう
さひ遊女おしくぐわくらりあひて一日のけうゑし
と宮遊女ごろら見よくひまそめハまうのれ世四代
とおすんかん侍ぬれどけいさびのやうまうこゝろもあやう
ぶくまずのひぐくまのゝめどもとしのわりてぞまくひの
おうこともすん侍しぞうつがらくのものぐ上手でども
お猫かうまのほけひくくしまえそしめしとくの人

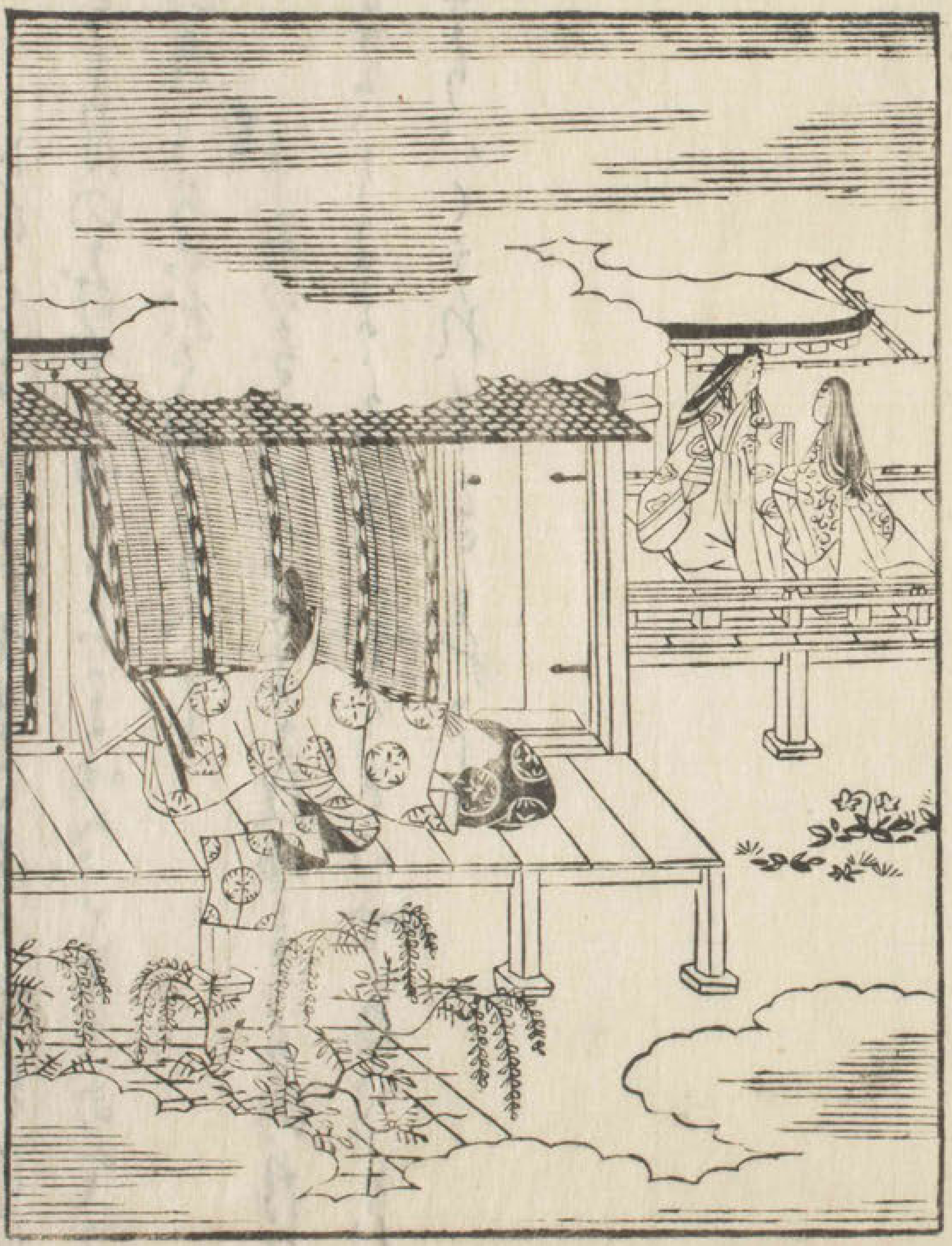
させまへるけおすうおまされも猫ぞくまとひ出おへぞ
やうあすんし侍しとみえきしまへぞてきるとくの人
とこたまふとも侍らず。ぞお猫やけびとまぞてまぞ
おすかまれて志どもれぞてうしまる惣侍しあかうぞ
竹のとまうハ柳営苑まへとゞまぞうしさいれ竹
ともろうめんくゝ遊へしまぞまして来るゆく芸ま
立出させめへらまじらば世のめい猫くまや侍ら
まじやき宮遊女弁中ねたまでまうおめてうらん
まぜみず浅志川ぞらくまもみくれど心もこゝろへ
あくきて御まろび遊女いと面白しがれ有明の見へに
くされらし夢を御猫し出そいざと袖おすげうし

うきよの絵は東宮にばかり月かゝりとおもしろくこめ
られけるよりみなしるされけるを、おなじく
むかしかゞれ絵なんど絵ならはあしけれど、いづれ
ともしてさま〳〵の絵にあそびまうけつゞ
けんも人よろこびひらきつひ絵なやまひの卅余日
大の大夜のゆきのりらは上達部かんこさちをほくつ
くへすてやがて夜の花のえんも絵花ざかりは色々
さる紙のちりちりんとやさしくされさりけんなど
されてさく桜二本ぞいと面白きおもしろうて
まゐる夜と宮さらの御まゐれ日ぐさしあらやけ
うつされしきれし絵とのさやうすて御事

むかしめしうまでありしおんみ源氏の君はまだ一日
内までかへりいめんのついでまでありし絵しらぬぞ
おもしろければみちおもしろきものにも人あまりしと思して
これの大将をさそひまゐりし絵
たゞ我宿の花しみすべての色あらばあまりはさら
まことに優ましくうちまさるおもしろき程まゐらせ給へば
そうし絵書きがかゝりやとかくいきおそいわざと
あやうさぞやうもれをようし女こゝろちおずやもれ
ひ出る前よりすればおすべての程なりふまうしさるなど
の絵をすれこそひきずひさつてろひあそべ
うらく御ぞまうされてぞわたり絵さらこの

しのゝわれみなれしゑびぞめれしるがゝれたるい
とおぼしくひきて。これ人はうへのきあたらはおぼされ
かならずきみをそへのなまめきたるまで。けれ
わりなくるれさ陵げるいとこなり。花のすかたも
けされて中にこそざまのしはなすんおもびわずいは
とおもおもうしのひて来まてうしかけゆく程は
源氏のきこいろうしもひたやめかさ陵はまてなし
あそばのきされさらはあん志ん殿は女一の宮女二の宮
のおりしますひんがしのとぶらるおりしてぶらお
まへりかぢはしるきのやまゐるあまりてあれば
かうしどもあげわたしてべいぞおはしける。紬

ぶらひぐさうられおりおぼしてことしきこゆめさまて
むさう殿。かさそしうしずまげ藤つぼやうりとおぼ
しめうおほやましきまはりといかうしおもされて。
よびまて侍うしこゝれど、げれまへまうしそいらけ
まうくさせのあよてつまぞれきす殿ひさく給
へぞおれかづらしとうゝめ人しそやへぶとるまさ
ゆりはうしち侍うみすれどいふのし給らう給ふ。
おもくましうはおくるゝどもとすべてのわうぞ
どもまはおくずおてまおもしきけくひまかう、
そらだき物いとくふうくゆりてかゝあのそとお
ひびゝるやうるうちかうすのひるうて心ますおく



中十七

ありさけるひからとられにまめゝしうさうと
とられるわざかなとてやむごとなきこれかれぐの
きぬとてよろこびのあまりへるなるべしさうしも
ゆかりの人々もみなれどもさすがなおしうおぼされ
ていづれなかんともわかちつゞれて翁さそれ
てかくしめはみなどかわりおほとけなりいるあひ
みなしてかゝりおもまへり。翁やうやう夜の人なき
御うちかなとといふかはく心ちしてぬすみやあふれいふ
へもなくてたゞ時々はうちなげくけしきひとろう
よりかゝりてまへすゞろにてとおぼえいたり

けさうちみやまおろしふかれはの
うしろのかげやミゆるともちるまゆへうしとしおもへこ
のみとえたみだめあすらべし
暁月 うちいおくるたのしきまはゆふぐれのそら
さそしまものはものやそどいかゞおもふべきれ
ありふとうれし ときおもへる